

探究する心を育む I

～ものとの関わりを手がかりにして～

○佐藤 寛子 宮里 暁美 石川 綾子 伊集院 理子 上坂元 絵里 川辺 尚子
高橋 陽子 灰谷 知子 渡辺 満美 (お茶の水女子大学附属幼稚園)

I. はじめに

本園では、大学との共同研究のテーマを受け、平成 24 年度より、「探究力・活用力が発揮される生活」というテーマで研究をすすめてきた。このテーマをかかげるにあたって、〇〇力という言葉が幼児期の暮らしに馴染まないのではないかとという迷いがあった。いずれにしても、「子どもたちのありのままの姿」を出発点として研究を進める私たちの研究の方法を変えずに取り組みことを共通理解し、教師側が「探究」ということを意識し、「探究する子どもたちの姿」を、実践記録、写真記録、ビデオ記録に残し、蓄積された記録をもとに話し合いを重ねてきた。話し合いの中でまず「透明な素材」と子どもたちの関わる姿が注目された。

そこで、探究する心を育む I では、「透明」の特徴に着目しながら、「もの」との関わりを手がかりに「探究への道筋」「探究する心」について省察していく。

II. 事例 2つの事例に絞って事例の概略を示す。

3歳児5月の事例「きれいになあれ、きれいになっちゃえ」

5月、園庭に枝垂桜の黄緑色の実が落ちていた。A 児は、透明なビニール袋の中に実を拾い入れると、水道に走って行って水を入れた。そして、実が落ちているところに戻って、「きれいになあれ、きれいになっちゃえ」と言いながら、実をさらに足していった。そのうち、A 児は、ビニール袋の口をしっかり握って、立ち上がり、ぐるっとその場で一回りした。そして、目の前にビニール袋をかざし、中の実の動きをじっと見た。ゆっくり回ったり、勢いをつけて回ったり、ビニール袋を揺らしてみたりしては、繰り返し実の様子を見た。

考察「きれいになあれ。きれいになっちゃえ～」という言葉から、A 児は「きれいなもの」を求めて、水の中に実を入れていたことが分かる。水が入ったビニール袋の中の実がA 児の動きに即応して動いていることを感じたA 児は、自分が回転することで、実がどうなるか、実際に動いて試したのである。薄い透明なビニール袋を通して、実の動きが、横から、下から、上から、如実に見えることがA 児の心を惹きつけていった。片時も手放さないようにしていたビニール袋はA 児にとって、自分の体の延長のように思えたのだと思う。自分の体の延長のように思えてしまうビニール袋だったからこそ、思わず自分が回ってしまうというA 児の動き、A 児の探究を生み出していったのだと考える。

5歳児 10月の事例「水族館を作ろう」

「水族館を作りたい」と考えた子どもたちはアトリエ(多目的室)の壁面を透明な青いロールビニールで覆い、切り取った魚の絵を貼り付けた。水族館らしい空間作りを意図して、部屋の中央部にテント枠を置き、大きな透明の青色ビニールシートをかぶせてみた。中に入り、周りを見回し、上を見上げた子どもたちから歓声が上がり、B 児の発想で、魚のお面をかぶり、テントの中で泳ぎ始めた。C 児だけは「ここは見る所なんだよ」と困惑顔だったが、泳ぎ続ける友達を見て、ドアを作り「あけたらすぐにしめてください。さかながにげます」とい

う表示を作った。

その後「水族館だからショーをしよう」というアイデアが出た。魚たちはテントから出て、外で演じ始めた。今度はB 児が水のある場所を気にするが、魚がテントの中から外に出る時に、C 児がドアを開け水をかいたすようなしぐさをしたことでB 児も納得してショーを続けた。

考察 C 児は、水槽の水の存在を意識しながら遊んでいたが、テントや魚などの「もの」が出現したことで、水族館の水の流れが自分のイメージと食い違うことに気づき、戸惑う。透明ビニールシートはどちらからも同じように見えるが故、葛藤が深まった。C 児は、自分のイメージにこだわりながらも友達や教師の思いを受けとめ、テントにドアをつけることを着想し、自らのイメージを柔軟に変えていった。C 児は自分の葛藤や考えを言葉で友達に伝え、行為で示している。その一連の行動が、B 児が葛藤を乗り越える一助にもなり、友達の間で水の流れを可視化することにつながったともいえよう。

一人ひとりの子どもが、自分のイメージを実現したいと懸命に考え、迷いや疑問を友達に伝える。対話を通して、子どもたちの活動への取り組みが深まり、イメージの共有がもたらされていった。

III. まとめ

事例を検討する中で、「透明」なものに興味をもち、遊びの中でさまざまに関わる子どもたちの姿が浮かび上がってきた。

容器が透明だと、中に入れた「もの」をいろいろな角度から見ることができ、中の「もの」の動く様子、変化していく様子をよく見ることができる。よく見ることで、気付かなかったことに気付いたり、「なぜ?」「どうして?」「不思議だな?」など、「探究する心」が動き出していく。

「探究する心」が動き出した子どもたちは、自ら体を動かして「もの」に関わることを始める。ただ見ているだけではなく、自らの動きで変化を生み出していこうとするのである。自分の身体の動きが加わることで、対象物として見ていた時とは違って、「もの」との距離が縮まっていく。自らの身体の動きを通して、さらに発見したり、考えたりしていく。「探究」の扉が開かれていく。

5歳児の事例で見てきたように、友達や教師とのやりとりや、さまざまな素材との出会いの中で、自分のイメージと、目の前の出来事とのずれに戸惑い、どうしたらよいかと葛藤する体験を通して、「探究」はより深まっていく。

以上のことから、美しいものを美しいと感じたり、不思議さにどきどきしたりする感性、自分の身体を動かし、葛藤を味わいながら自分の感覚を研ぎ澄ませていく体験の積み重ね、「ひと」や「もの」との対話的關係などが探究する心の基盤になることが明らかになった。